

# 朋友だより

朋友だより、111号をお届けします。

私事ですが、今年7月に2週間ほど入院し、皆様にご心配をおかけしましたが、お陰様で順調に回復しました。

今回は、入院中にいろいろ考えた原発事故をめぐる問題について取り上げてみました。ご感想などお聞かせ願えると幸甚です。

2011年8月

(有)コンサルタント朋友  
代表取締役 奥長弘三



## 「原発から撤退を」の声に 合流しよう



### 世界が日本の国民の判断に 注目している

3月11日の大震災と津波によって起きた福島第一原発の事故から5ヶ月経過した現在でも、収束の目処が立っていません。それだけでなく放射能汚染の被害が全国に広がりつつあります。

原発をどう考えるかが、大きな問題となっています。ヨーロッパでは、福島事故を契機に自国の原発政策の見直しが進んでいます。ドイツでは2022年までに原発を全廃することにしました、またイタリアでは国民投票の結果、圧倒的多数で原発からの撤退を決めました。

日本ではどうでしょう。政府及び原発推進派は原発推進に固執しています。一方、国民の意識は圧倒的多数が原発からの撤退を支持しています。8月1日付、日経新聞の世論調査では、今後原発を増やすべき1%、現状を維持すべき24%、減らすべき50%、全て無くすべき21%となっています。

何故、原発がそれほど問題なのでしょう。4点ほどにまとめることができます。

1. 原子力を扱う技術が未完成である。  
原子力は一旦暴走したら、それをコントロールする技術を人類は未だ持っていません。このことは現在、福島原発事故で、嫌と言うほど味わっています。
2. 放出された放射能物質は、目に見えないが、長期間にわたって人類を苦しめる。  
66年前、広島、長崎で投下された原爆の後遺症で今なお、苦しんでいる人が何人もいます。今回の放射能汚染が子供に与える影響が懸念されます。
3. 使用済核燃料を処理する方法がまだ世界的に確立されていない。  
ガラスで固めて、地下に10万年間貯蔵する方法などが検討されています。(石橋克彦編『原発を終わらせる』岩波新書 2011年7月 P.84-85)
4. 原発は二酸化炭素を出さない上に、発電コストが安いことが売り物になっていたが、このコストには廃炉処理費とか、使用済み核料

の処理費は含まれていない。これらを含めれば、発電コストは決して安くはないことがはっきりした。

このような問題を抱えた原発が、日本には54基あり、しかもそれらのかなりのものが地震活動断層の真上、或いは周辺に立地しています。第2、第3の福島原発事故がいつ発生してもおかしくない状態です。

現在、私達に問われているのは、原発は日本社会と共存可能なものなのかどうかということです。このように危険は原発からは、段階的に撤退して、代替エネルギーとして太陽光、風力、地熱などを利用した再生可能エネルギーの開発に力を注ぐのが良いでしょう。今、この声が国民の間に、急速に広がっています。

### 生活のあり方を見直す良い機会

原発をなくすと、電力が不足し、停電になるぞ、という嚇しがよく聞かれます。急に原発を全廃すれば当然社会的混乱が生じますから、段階的に撤退することが必要です。

これからの低エネルギー社会は、「がまんの社会」ではなく、人間らしい生活をする社会です。人間はもともと夜は寝るものです。24時間活動しようという考えを改める必要があります。

今から6年前、筆者の地元、文京区商店街連合会会長の島田幸勇氏は、店舗の24時間営業の見直しを提案しておられます。チェーン店の24時間営業は昔からの地元の小売業を圧迫するだけでなく、青少年の非行の温床になっている、「夜は寝る」のが人間の本来の生活パターンなのだと主張されます。(奥長著『小さな会社だからこそ出来る』旬報社、2010年7月、P.155) 先見性のある提案です。

夜間の照明も見直しが必要でしょう。「暗い方が落ち着くな」といった感覚で、不要な明るさは排除していきましょう。日本の文化は昔から「光と闇」「表と裏」を共に重視してきました。

生活のあり方を見直すことで、相当量のエネルギーを節約できるでしょう。

## 再生可能エネルギーの可能性

原発の代替になるものは、再生可能エネルギー(自然エネルギー)でしょう。再生可能エネルギーには大きな可能性が広がっています。資源エネルギー庁の資料をもとにすると、日本の太陽光、風力、バイオマス・エネルギーを合計した物理的限界潜在量は12兆キロワット/時近くで、これはいまある原発の総発電力の約40倍を越えるものとのことです。(吉井英勝著『原発抜き、地域再生の温暖化対策へ』新日本出版社2010年10月P.204)

世界では現在、再生可能エネルギーの分野では「第4の革命」と呼ばれ、驚異的な変化が始まっています。農業、産業、ITに次ぐ「第4」という意味です。この分野の投資額は毎年60%の成長を続け、リーマンショック後でもなお着実に成長し、2010年は前年比30%増、約20兆円(2300億ドル)に達しています。(石橋克彦編『原発を終わらせる』岩波新書2011年7月P.180-181)

これら世界の動きから見ると、日本は完全に遅れをとっています。しかしその日本でも、新しい挑戦がいくつかの地域で進んでいます。

例えば、高知県檮原(ゆすはら)町という、91%が森林の町では、大型風力発電機を設置し、その電力を四国電力に売り、その収入の一部を町内の民家の屋根に太陽光パネルを設置する際の町独自の補助金に使っています。国の補助金と合わせると、住民にとって初期投資の半分近くを補助金で賄えることになり、約100軒の屋根に取り付けられています。

また建築材の生産・加工と木質ペレット燃料の生産が結びつけられているのも、同町の特徴です。檮原町森林組合は日本で初めて、森林組合としてFSC(国際的な森林認証機関)からFSC森林認証を取得しました。二酸化炭素の森林吸収による国内排出権取引での収入なども予定して、その収入で森林整備費を賄って、林業をはじめとする地域経済の持続的発展の道を切り開こうとしています。

同町では小水力発電にも取り組み、人口4000人の町で、エネルギーの自給率は3割という「再生可能なエネルギーの町」になっています。(前出、吉井著、P.18-21)

再生可能エネルギーは小規模分散型、地域密着型が特徴です。太陽光、風力、水力、地熱、バイオマスなどそれぞれの地域で異なり

ます。それだけに地域のネットワークが重要になります。当然、関連産業の発展も不可欠の要素となります。まさに中小企業の出番であり、雇用創出も期待できます。

## 「原発から撤退を」の声に合流しよう

現在、日本全体が福島第一原発からの放射能被害で振り回されています。

手塩にかけて育てた牛が放射能汚染の疑いの為に、出荷停止になっている酪農家の無念さ、収穫を間近に控えた稲の汚染の不安に戦っている農家の悔しさ等々。同じ経営に携わる者として、その痛みは良くわかります。

政財界、官僚、御用学者、大手マスコミからなる原発推進派は、自己の利益を追求する為に真実を知らせず、「安全神話」を振りまき、国民を欺いてきました。また批判する勢力には、徹底的に圧力をかけ、その影響力が広がらないようにしました。そして助成金を活用して、地元の賛成を取り付け、原発立地を増やしてきました。そのやり方は第二次世界大戦前夜及び最中の日本のファシズムのやり方と全く同じです。ファシズムは国民を騙し、日本を第二次世界大戦という無謀な戦争に引き込み、近隣諸国に多大な迷惑をかけただけでなく、日本を破滅に追いやったのです。原発推進派は歴史から何も学んでいません。

しかし、今回の原発事故を通して、彼らの卑劣なやり口が白日の下にさらされることになりました。それでも今なお、政府や推進派は原発を諦めません。しかし、日本社会で原発をどうするかを最終的に決めるのは国民です。そしてその日本国民の判断を今や、世界の人達が注目しています。

「原発から撤退を」と言う国民の声に、私達中小企業経営者、経営幹部が合流することを呼びかけたいと思います。原発から撤退し、再生可能エネルギーの開発に取り組むことは、持続可能な社会をつくることにつながります。これにより人間が人間らしい生活を取り戻すことができます。そこでは地域と中小企業が大きな役割を果たします。

そしてこの道は、昨年閣議決定された中小企業憲章に魂をいれることにつながります。



## 長崎平和宣言 (2011.8.9)

今年は広島・長崎に原爆が投下されてから、66年経過しました。

8月9日、長崎での平和式典において田上富久長崎市長が行った長崎平和宣言は、非常に格調の高いものです。これは田上市長が一人で考えたものではなく、3ヶ月にわたりプロジェクトチームで検討されたものだそうです。それだけに重みのある宣言です。

今回の福島原発事故にもふれながらの訴えです。抜粋でご紹介します。

(前略)

「ノーモア・ヒバクシャ」を訴えてきた被爆国の私たちが、どうして再び放射線の恐怖に脅えることになったのでしょうか。

私たちはこれから、どんな社会をつくらうとしているのか、根底から議論し、選択する時がきています。

たとえ長期間を要するとしても、より安全なエネルギーを基盤とする社会への転換を図るために、原子力にかわる再生可能エネルギーの開発を進めることが必要です。

(中略)

人もモノも溶かしてしまうほどの強烈な熱線。生存者がいたとしても、強い放射能のために助けに行くこともできません。放射性物質は遠くへ運ばれ、地球は広く汚染されます。そして数十年にもわたり後遺症に苦しむ人々を生むこととなります。

そんな苦しみを未来の人たちに経験させることは絶対にできません。

(後略)

\* ~ あとがき ~ \* ~ \* ~ \* ~ \* ~ \* ~ \* ~ \* ~ \* ~ \* ~ \* ~ \* ~ \* ~ \* ~ \* ~ \* ~ \* ~ \* ~ \* ~ \*

朋友だより 111号をお届けいたします。

夏の盛りに咲く黄金色の花“ひまわり”。この花の根や花びらが放射線を吸収し汚染された土壌改善の効果があると言われていました。チェルノブイリでもそれは実証されたという事です。

今回の原発事故を受け、植物の持つ自然の能力を期待して各地で“ひまわりプロジェクト”が立ち上げられていることをネットでも報じています。太陽のような光と輝きを持っている“ひまわり”別名日向葵(ひゅうがあおい)は、何か人々に勇気と希望を与えてくれそうな気がします。

8月の花と言われるその花言葉に「私の目はあなただけを見つめている」「あなたを幸福にする」というのがあります。復興への精神的な支えにもなってくれたら嬉しいと思います。(野上)



# 朋友

有限会社 コンサルタント朋友

〒113-0034 東京都文京区湯島3-23-8 第六川田ビル201号

TEL . 03-3833-6025 (代) FAX . 03-3833-6035 .

URL:<http://www.consultant-hoyu.co.jp>